

2022年10月23日（日）主日朝礼拝説教

『地上に火を投ずる』 井上隆晶牧師
コリントの信徒への手紙二 7章 8～10節、ルカ福音書 12章 49～53節

①【聖霊が来なければ回心はできない】

●連日、旧統一協会の解散命令請求について国会で審議されています。1980年代に靈感商法が社会問題となり、だいぶ TV で叩かれましたから派手な動きはしなかったのですが、それ以降も信者から多額の献金をさせ、家庭崩壊を起こさせてきました。沈黙の 30 年が過ぎ、例の狙撃事件をきっかけとして再び問題が明らかになったのです。先日、インターネットの記事を読んでいたら旧統一協会に親戚の者が入ってしまい、何とか脱会させようと家族や親族が奮闘したが結局出来なかった、というようなことが書かれていました。そして「一般の人ではどうも太刀打ちできない」と書いていました。本当にその通りです。家族がいくら泣いて頼んでも、いろんな情報を教えても辞めません。知識だけでは人はカルトを辞めません。実際、あの山上容疑者の母親は、息子が大変な事件を起こしたのに、「自分の信仰が足りないからこうなったのだ」と、ますます熱心になっています。

ではどうしたら人は救われるのでしょうか。私の経験では、カルトから脱会できる人は多いのですが、その後キリスト教の信仰を持つ人は少なく、大体 10% くらいです。重い皮膚病を患う 10 人は皆、病は癒されましたが、キリストの所に帰って来たのは一人だけでした。（ルカ 17：17）それと同じです。人が信仰をもつためには聖霊の助けが必要です。

先ほど朗読した個所で、イエス様は「わたしが来たのは、地上に火を投ずるためである。その火が既に燃えていたらと、どんなに願っていることか。」（ルカ 12：49）と言われました。イエス様が願うこの火とは何でしょう。続く個所でイエス様は「あなたがたは、私が地上に平和をもたらすためにきたと思うのか。そうではない。言うておくが、むしろ、分裂だ。」（12：51）と語り、家族が分裂するといっておられます。ですから火というのは分裂を起こさせる火種のことだと勘違いする人がいると思いますが、この火というのは「聖霊」のことなのです。「聖霊」が来ると人は分かれるのです。光の到来によって光に属する者と、闇に属する者に分かれるからです。「しかし私には受けねばならない、洗礼がある。」（12：50）とあります。この洗礼とは十字架を意味しています。イエス様は聖霊を地上に送るために、十字架で苦しまなければならないと言っておられるのです。聖霊はキリストの死と復活、昇天の後に来ることになっているからです。これを癌の治療として考えると分かりやすいのです。人類の罪と死という病の治療は、神の両手である御子と聖霊によって行われます。ただしそれぞれ働きが違うのです。イエス様は外科手術をし、人類から罪と死（病巣）を取り除きます。しかし手術した人はすぐには退院できません。しばらく入院して体力が回復するのを待たなければ

ばなりません。つまりリハビリが必要です。人類をリハビリし、御子の似姿にまで回復させるのが聖霊なのです。イエス様の働きの全ては、この聖霊を呼ぶためでした。実際、弟子たちは生前にイエス様がいくら教えても教えを理解できませんでした。聖霊が降ったとたん、御言葉を思い出し、理解し、信じる力を得たのです。この聖霊が来なければ、人は回心も出来ず、神を知ること、信仰を持つことも、聖書を理解することもできないのです。聖霊は神の霊、キリストの霊であり神ですから、神の心を知っているのです。だから聖霊を受けると、神の思いが分かるのです。

②【コリント教会の悔い改め～まことの回心とは心地よいものである～】

コリント教会は様々な問題がある教会でした。パウロはその問題に対して、手紙を出すという形で指導しました。第一の手紙と第二の手紙が残っていますが、その間に、別の第三の手紙（「涙の手紙」と呼ばれている）というのがあったのですが、今では紛失してしまい残っていません。この第三の手紙は、事件を起こした兄弟と教会員たちを叱責した手紙でした。どんな事件を起こしたかと言うと、文面から推測すると「教会を分裂させる運動」だったらしいのです。パウロはコリント教会を立ててから、すぐに他の地域に伝道に出かけました。ところがパウロの後からやってきた偽の教師が、パウロは使徒ではない、彼の教えは偽物で、彼はお金の為にやっているのだと嘘を教え、教会員の心を惑わしたようなのです。しかし教会員たちはパウロの手紙を読んで、悔い改めました。それが7章に書かれています。パウロはここで悲しみには二種類あると語ります。「**神の御心に適った悲しみは、取り消されることのない救いに通じる悔い改めを生じさせ、世の悲しみは死をもたらします。**」(7:10) ここで言われている「救いに通じる悔い改め」とは何でしょう。「まことの悔い改め」とは、人間の断固とした決心とそれに伴う行動をいうものではありません。「まことの悔い改め」は人からのものではなく、神からのものです。人間は悲しみ悔いることはできますが、聖霊が働かない限り、信仰に立ち返ることはできないのです。まことの悔い改めというのは人間の力ではできないということを教えています。

聖霊の働きの一つは人を「照らす」ことにあります。聖霊が来ると、その人の心と魂を照らすので、罪が分かるようになります。イエス様はそのことを「**その方が来れば、罪について、義について…明らかにする。**」(ヨハネ 16:8)とされました。しかしそれだけではなく、同時に神の愛と恵みも見えるようになります。パウロも「**すべてのものは光にさらされて、明らかにされます。明らかにされるものはみな、光となるのです。**」(エフェソ 5:13~14)と語っています。聖霊の光を受ける者は、光に変わるのです。この「罪を知る事」と「神の恵みを知る事」の両方が、神から来る悔い改めのしるしです。片方だけだと神によるものではありません。必ず二つです。そして何よりも恵みを知ることの方が先に来る

のであり、その後、罪を知ることが来ます。その神の恵みがあまりにも大きいので、心から溢れ、ゆとりができます。そこで自分の罪を見、受け入れることができるのです。本物が現れれば、偽物は消えるからです。ゆえに悔い改めは心地よいものなのです。パウロも聖霊に照らされてキリストをまず知り、その後自分の間違いを知りました。

●新神学者シメオンはこう語ります。「回心は暗闇の世界から光の世界に導く門です。」サーロフのセラフィムはこう語ります。「神の霊が人の上にくんだり、その現存のあるふれで人をつつむとき、人の心はいいつくせない喜びに溢れるのです。なぜなら、神の霊に触れる人はみな喜びに満たされるからです。」

回心とは、単に私たちの努力ではなくて、私たちの心に浸みとおってそれを変容する聖霊の輝く贈り物です。

③【あなたは神を知っていますか？】

まことに不思議なのですが、罪を犯して悲しみ、無力感に打ちのめされてキリストのもとに帰ると、そこで待っているのは裁きではなく癒しであり、恐れではなく平安なのです。考えてみてください。病の不安と恐れを抱いて病院に駆け込む患者を「お前が悪いのだ」と裁く医者がいっただどこにいますか。キリストは医者です。患部を見せてごらんと言われ、手を置いて油を塗って癒してくださいます。患者は「ほっと」安心して帰るでしょう。行く時は「恐れと不安」がありますが、帰る時は「安心と喜び」に満たされるものです。私の知る限り、私が触れたキリストや聖霊はとても暖かく、愛に満ち、心が平安に満たされるものであって、そこには恐怖も脅迫も不安も一カケラもありませんでした。私は神をそのように体験しましたし、毎回そのように体験しています。しかし、この世には神を厳しく、恐ろしい方であるかのように語る教会があります。

●大阪にあるマンモス教会で、そのの信者が娘のいる地方へ引っ越しをしようとしたところ、他の信者たちがその人を取り囲み、家を買ってあげるから留まるように説得しました。にもかかわらず、その方が娘の所に行きたいと言うと「あなたは地獄に落ちる」と吐き捨てるようにその人に言ったというのです。私はそれを聞いて驚くと共に、神を冒瀆する怒りを感じました。彼らは「神とはケチで厳しくて、自分の言うことを聞かない者を地獄に落とす方だ」と証したのです。

その教会の牧師は本当に神に出会ったこと、触れられたことがあるのかと、私は疑ってしまうのです。彼らは神を知らないと思えないのです。つまり聖霊を受けていないのです。まるで奴隷の信仰です。そのような教会に何百人もの信徒が通っておられるのです。残念です。

先日の朝の祈りで、「わが神、わが神、なぜ私をお見捨てになるのですか」というイエス様の叫びについて語りました。死とは、命の源である神からもっとも遠く

隔たった場所です。死とは、神（すなわち命）に見捨てられることです。御子イエス様は人間性において神に見捨てられますが、神性において見捨てられた人間を捜しに行かれるのです。見捨てられないと（死なないと）、死んだ者たちの所へ行けないからです。こうして神は、肉体をもって死に、死者を追いかけます。昔の祈祷文は「神はアダムを求めて地上に降り、地上で見つからないので、地獄の底にまで降られた。」と語りました。私たちの神は、私たちが死んでも、私を生かす為にどこまでも追いかけてくる神です。そして私を見つけ、肩に担ぎ、父のもとへと連れて行ってくれます。神は死者を見捨てません。この方の人間に対する愛は半端ではありません。私は、命である方に見つけてもらったのです。そしてあの方は、ご自分の息である聖霊を私に注いでくださいました。神の息が入ったので私は生き返ったのです。この方から二度と離れることはないでしょう。私は今、神の息をしています。それが何とも嬉しいのです。これからも聖霊に教えてもらい、神様のすばらしさを皆さんにお伝えしたいと思います。